

ペテロ第一4章7節 「終わりの日のための用意」

1A 万物の終わり

1B 揺るがす方 ハガイ 2:21-22

2B 過ぎ去る世の有様 1コリント7

2A 心の整え

1B 誤った備え

1C 備えをしない人

2C 自分のための備え

2B 御国の到来

1C 世界に広がる救い

2C キリストにある一致

3C イスラエルの救い

4C 義の飢え渴き

5C 希望と信仰と愛

3A 身の慎み

1B 世の思い災い

2B 祈り

本文

みなさん、おはようございます。今朝のみことばは、ペテロ第一 4 章 7 節です。「**万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。**」

今、私たちの教会、カルバリーチャペル・ロゴス東京では、黙示録を読み始めています。聖書全体を創世記から順番に見ていきましたが、ついに黙示録まで来ました。けれども、共に聖書を順番に通読していると、黙示録だけが、終わりの日について話しているのではないことに気づきます。旧約時代の預言者たちはもちろんのこと、主イエスご自身が、そして使徒たちが一貫して、手紙の中で教えていますね。教えていない書物のほうが、数えるしかないのではないかと思います。しかも、使徒たちはすべてが、自分たちの世代に主が戻ってこられることを、かなり意識していました。これが、使徒たちの教えであり、私たちは、使徒たちが教えたことを聞いて、それを伝える務めが与えられています。今、私たちの生きている世代に主が来られるのだと信じて、生きるのです。

1A 万物の終わり

1B 揺るがす方 ハガイ 2:21-22

ところで、合同修養会が近づくにつれて、私は去年の合同修養会のことを思い出していました。

23年10月7日から9日まででした。カルバリー西東京の方が、私に、「どうも、イスラエルで大変なことが起きている」と教えてくれたのです。ロケットが大量にガザ地区からイスラエルに落ちているようなのですが、それは今までも起っていたことです。ところが続けて、彼は、「どうも、フェンスを越えて、イスラエルの中に入ってきているようだ。」とのこと。これは、今までなかったことです。それで、私は心がずっしりと重くなりました。状況が次第に明らかになり、ハマスが越境攻撃して、イスラエルの人々にあらん限りの虐殺を行っていたことが分かってきたのです。

イスラエルが建国されて以来の大惨事だという声が国内から聞こえてきました。私は、以前、エジプトとシリアによる奇襲攻撃から始まった、ヨム・キプール戦争のような大きな出来事だろうと思いました。ところが、ヨム・キプール戦争どころではない、その戦争を経験した人は、「はるかにひどい」ということなのです。彼らは、ホロコースト以来の惨劇だと、なんとホロコースト持ち出しました。一日のうちに、約1200名が殺されました。イスラエル人口は900万人ぐらいですから、日本の人口にすると、1万6千人が一気に死んだのと同じぐらいの衝撃です。イスラエルは、「もうこれで、今までのイスラエルではなくなった。」と言っています。240名が拉致され、101名が今も、ガザに人質になっています。

しかし、このような衝撃は、世界で起こっていました。コロナ渦です。私が何よりも衝撃だったのは、一気に世界のすべての活動が停止させられたことです。教会の礼拝が中止になりました。これは、あってはならないと私は思っていました。例えば、お隣、韓国の教会も軒並み、礼拝を中止しましたが、韓国の教会史上、たとえ朝鮮戦争が勃発していても、礼拝は献げていたそうです。そして、ある写真を見て衝撃を受けました。世界の三大宗教である、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教のすべてが祈るのをやめたことです。メッカには、だれもおらず、バチカン広場にもだれもおらず、嘆きの壁にもだれもない写真を見ました。それで私は、獣の国によって、あらゆる生活が統制下に入るというのは、十分あり得ることなのだと、その予告編のように思えました。

そして、ロシアがウクライナに全面戦争をしかけました。今も続いています。これもまた、衝撃です。こんな侵略戦争、世界大戦の前の帝国主義そのものじゃないか！と思ったのです。そして、エゼキエルの預言の「マゴグ」を改めて調べると、エゼキエルの時代のマゴグは、今のウクライナと大きく重なります。

このように、次々と、これまで当たり前だと思っていた秩序が一気に壊されていくのを私たちは、目の当たりにしています。そして天候不順を私たちは、経験中です。ペテロは、ここで「**万物の終わりが近づきました**」と言っていますが、それは天地、自然界が崩れ落ちることだけでなく、主は、その中にある有様を揺り動かすことを語っておられます。ハガイの預言にこうあります。「2:21-22 わたしは天と地を揺り動かす、もろもろの王国の王座を倒し、異邦の民の王国の力を滅ぼし尽くし、戦車とその乗り手をくつがえす。」天と地だけでなく、もろもろの王国を倒すと言われま

す。また戦車や乗り手をくつがえす、と言われていています。今まで、安定していると思っているものは揺り動かされます。国々が揺り動かされ、また軍隊が動いて、何をしているのわからないような状況になると、主は言われるのです。ですから、今、その前兆を見ているのです。

2B 過ぎ去る世の有様 1コリント 7

そのためペテロは、「**心を整え**」なさいと言います。私たちが、これまで頼りにしていたもの、その有様は過ぎ去るのですから、それがいつまでも続くものだと考えてはならないわけです。パウロが、コリントの人たちに勧めました。「I コリ 7:29-31 兄弟たち、私は次のことを言いたいのです。時は短くなっています。今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」世については、軽い付き合いでいなさいということです。

チャック・スミス牧師は、車が好きですね。けれども質素な人なので、旧式のを長年、使っていました。ある人が献品をして、新車をくれたようです。それでチャックは、主をほめたたえて喜んでいました。販売店から車に乗って、スーパーに立ち寄りました。駐車して買い物を済ませると、そこにわずかに傷がついていました。彼の賛美は怒りに変わりました。いったい、だれがやったんだ！と。家に帰って、息子さんが車庫に入っている新車を見ました。「お父さん、この傷なに？」と聞くので、いかに傷つけられたかを不満を述べたそうです。そうすると息子さんが、「この車だって、いつか焼かれてしまうよ。」そうですね、古びていつか廃車となります。また、終わりが来たら、万物は火で焼かれてしまいます。

2A 心の整え

1B 誤った備え

ところで、主が来られることについて、誤った考え方をしている人々がいます。

1C 備えをしない人

一つは、「主が来られて、すべてが改められるのだから、私たちが何をしても意味がない。」とする態度です。それで、日常の活動をやめて、極端になると、教会活動でさえもやめてしまいます。これは実際に過去に起こりましたが、教会を建て上げることも時間がないから、ただ伝道していればよいとしました。また、ある人は、毎週、中東情勢を語る説教をして、他のことは語らないところあるそうです。「主がすぐに来られるのだから、何かする意味はあるの？」ということです。

テサロニケの人たちの教会は、主が来られることを待ち望んでいましたが、パウロが強く戒めています。「II テサ 3:11 あなたがたの中には、怠惰な歩みをしている人たち、何も仕事をせずおせっぱいばかり焼いている人たちがいると聞いています。」「3:10 働きたくない者は、食べるな」とまで、

命じました。主が戻られるのが近いから、私たちは備えないといけないのだとしていますが、やっているのは、怠惰になって、人々のおせっかいなのです。

2C 自分のための備え

もう一つは、「自分たちのために備えている」人々です。これから、大患難が来るから、獣の国になる。その時には、売り買いができなくなるし、獣の数字を額と手に押されてしまう。だから、そのように対抗できるように備えよう、ということを考えます。そして、引っ越しをしたり、家に備蓄をたくわえたり、たくさんの情報を集めて、あれこれをする決めて、一般社会から離れて暮らします。アメリカでは、食糧も銃も蓄える人たちもいるそうです！これは、主が来られる備えではありません。

2B 御国の到来

イエスも、「用心していなさい」あるいは、「用意しなさい」と言われましたね。何を用意していればよいのでしょうか？どんな心備えをすればよいのでしょうか？それは、御国が到来することを思うところから来ます。「マタイ 6:10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。」聖書には、終わりの日に主が神の国を建てられる幻でいっぱいです。その幻を信仰によって私たちは望みます。そして、その回復された姿を見て、私たちはそれを目標にして前に進むのです。神の国と神の義を第一に求めなさいと、イエス様が言われました。

もちろん、主が再び来られることによって、御国が到来します。それまでは世はどんどん暗くなります。しかし、神の御霊が与えられている私たちは、御国にあるものをこの地上においても求めていきます。そうすることで、闇における光になり、光の子どもとして輝くことができるのです。「ピリ 2:15-16a それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代のただ中であって傷のない神の子どもとなり、いのちのこたばをしっかりと握り、彼らの間で世の光として輝くためです。」

1C 世界に広がる救い

主が来られて、世界がキリストの支配下に入れば、世界のあらゆるところで、主の御名がほめたたえられます。「イザ 24:14-15 彼らは声をあげて喜び歌い、西の方から【主】の威光をたたえて叫ぶ。それゆえ、東の国々で【主】をあがめよ。西の島々で、イスラエルの神、【主】の御名を。」このことが起こるのは、終わりの日、主が戻ってこられる時なのですが、しかし、その時に向かって、世界で福音が宣べ伝えられることを求めるのです。イエス様が言われました、「マタ 24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」主が来られることを待ち望む者は、世界に福音を宣べ伝えることに熱情を持つようになります。

2C キリストにある一致

そして、私たちは終わりの日に、主にあって一つにされることを知っています。「エペ 1:10 時

満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」イエス様をご自身にあって一つにされることを、父なる神に願い求めている場面があります。ヨハ 17:21-22 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。」

キリストにあって一つにされていくことが、終わりの日について学ぶ時に、視野に入っているでしょうか？終わりの日には、背教が起こることが第二テサロニケ 2 章に書いてあります。畑に毒麦が蒔かれることが書いてあります。それで、教会にも惑わしが入っていると言います。そして、教会の交わりを軽視して、自分たちだけでやっていくとなります。わずかな真理を知っている者たちだけで情報を共有し、他のものたちはサタンの惑わしに従っていくのだ、となるのです。これこそが、ヨハネが第一の手紙で警告している、反キリストの教えです。特定の情報や知識にしたがって、教会から離れていく者たちです。あるいは、教会から出て行って、別の教会を持つような動きです。

終わりの日において、教会にも惑わしが来ます。しかし、真理に立つ者たちの間には、これまで分かれていた人々が一つに集められます。私たちは、分裂しているところに、平和の架け橋をかける働きに召されているのです。平和を造る者は、神の子と呼ばれるという約束を、イエス様が語られました。キリストにあって、二つのものが一つになり、それで新しいひとりの人になると、パウロがエペソ 2 章で話しました。天において、あらゆる人々が、国や民族、言葉を超えて集められ、キリストの流された血によって、一つの神の民になっているのです。だからこそ、今、私たちは、互いに愛し合って、平和の絆で結ばれることに、情熱を費やす必要があります。

3C イスラエルの救い

そして、終わりの日には、主の愛される民、選びの民であるイスラエルが回復しています。「ロマ 11:25b-26 イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。」」イスラエルが、異邦人の救いの完成の後に救われるのですから、今からも、その働きを主が用意しておられることは明らかです。

イスラエルは、聖書の預言通り、世界からユダヤ人が集められて建国しました。しかし、そのほとんどはイエスを信じていないし、ましてや神さえも信じていない人が多くいます。しかし、今、イスラエルは苦しみを通しています。その中で、神に祈り、神を信じる人々が増えています。アメリカでは、ユダヤ系の人たちには信じる者がかなりいます。ですから、私たちは神に愛され、選ばれたユダヤ人に、キリストの愛を示すべきです。神に選ばれたイスラエルに、キリスト者としての愛を示すべきです。そのようにして、彼らはここに神がおられて、自分たちは独りではないことを知り、そして主

を求めるかもしれません。

4C 義の飢え渴き

イエス様の、山上の説教を思い出してください。「マタ 5:6 義に飢え渴く者は幸いです。その人は満ち足りるからです。」満ち足りるのは、主が来られてからのことです。しかし、その義に満たされることを切望して、今、義に飢え渴いているのです。今の世では決して満たされることはありませんが、それでもそれに飢え渴いており、御霊によって、信仰によって神の義を受け取ります。また捕えていないのだけれども、捕えるために、一心に走っている状態なのです。

5C 希望と信仰と愛

だから、パウロが第一コリント 13 章で言っているように、必要なのは、信仰と希望と愛なのです。私たちは、御国が来ることを待ち望んでいます。希望を抱いています。その中で、今、信仰を働かせて、御霊の導きによって、御国に向かって前進できることを行います。福音宣教であれば、宣教に関わります。キリストにある平和や一致であれば、その働きに、御霊によって関わります。イスラエルの救いについても、彼らのために祈ります。そのようにして、自分たちで神の国の義を実現するのでは決してないのですが、願い求めていくのです。その中で、信仰を十分に働かせないといけません。信仰は、目に見えない者を見えるようにして信じるのですから、何もないうようなところにも、主が何かをすると信じて、事を行うのです。

そして、その信仰の動機は愛です。「ガラ 5:6 キリスト・イエスにあって大事なものは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。」すべては愛によって始まります。キリストの愛に駆り立てられて、信仰を働かせます。

3A 身の慎み

最後に、「身を慎みなさい」との勧めについて、触れたいと思います。これは、元々、しらふでいるという意味です。酔いしれているのではなく、思いがしっかり明晰であり、整えられているという意味合いです。

イエスが、弟子たちに「目を覚まして、祈っていなさい」と言われた時に、彼らは物理的にも眠っていたので、迫り来る闇の力に対して何も用意できていませんでした。ペテロは剣を出して、祭司の息子の耳を切り落とし、それが終わったら、カヤパ邸で、三度もイエスを知らないと言いました。目を覚ましているとは、しっかりと、周囲の霊的な状態に気づいているのです。

1B 世の思い災い

その妨げになっているのが、世における思い災いです。「ルカ 21:34 あなたがたの心が、放蕩や深酒や生活の思い災いで押しつぶされていて、その日が罨のように、突然あなたがたに臨むこ

とにならないように、よく気をつけなさい。」深酒や放蕩と、生活の思い煩いがつながっています。生活の思い煩いによって、主が来られるのに用意できていないことが十分に起こりえます。

2B 祈り

だから、ペテロは「**祈りのために**」と言っています。祈りによって、心備えをして、身を慎むことができます。エペソ 6 章でパウロが教えています。「6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」

私たちが、主が祈りなさいと言われたから祈っている、「御国が来ますように」ということは、私たちが頭をこねくり回して理解するものではありません。そうではなく、祈りの中で培われていくものです。祈り合っていく中で、私たちが御国の幻が見えるように祈っていきましょう。